

# 『知日』と私

思い返してみれば、「八〇後」世代の編集長・蘇静君と知り合ったのは、二〇〇八年の北京オリンピックの年だ。季節は冬、それも稀にみる厳冬で、私は北京で作家の李銳氏との共著『燒夢』の出版にあわせて講演会を開いた。主催者は広西師範大学出版社と日本の国際交流基金だった。この新作は日本紀行をテーマにした本だったし、講演会は李銳氏との対談形式にしたので、くつろいだ雰囲気だった。私の背後の横断幕には「中国人作家の見た日本」と中国語で書かれていた。このような出版記念講演会はノーベル賞作家の莫言氏や人気作家の蘇童氏とも開催したことがある。莫言氏とは上海で、蘇童氏とは武漢で開催したものだ。講演会を聞きに来た蘇静君にこんな話をした記憶がある。「中国の日本に対する理解はこれまでと比べ物にならない時代になっている。作家の余

## 毛 丹青

華氏と京都観光をしたときに、ホテルのエレベーターで偶然女流作家の陳染氏と出くわしたが、こんな偶然が今の時代を物語っているよ」。それを聞いた蘇静君も様々な話をし、最後に「将来、日本文化を知るための雑誌を出版したい、毛先生も参加してほしい」と言われた。私はその場で快諾し、主筆の立場でテーマ選びと日本での取材に加わることなどを約束した。これまで何人もの中国人作家の初訪日に同行し、先ほどの李銳氏のような男性作家だけでなく、アニー・ベイビエをはじめとする女性作家にも同行したものだ。彼女は京都の手工芸が好きだったので、妻と三人で染色工房を訪れたことがある。そこで彼女は老職人の説明に聞き入り、それは一枚の絵のような光景だった。一人の中国人の女性作家が自然な状態で日本の細部に入り込む、こんなテーマは、文字だけの

本にするより、雑誌の形で再現するのが一番向いていると感じた。この点で蘇静君と私の見方は完全に一致した。

私達の考えをその後ずっと温め続け、それからの二年間、北京に戻るたびに蘇静君と会ったが、会議というものは開かずいつも食事をしながら思いつくままに語り合った。私は日本に暮らして二五年の中国人だ。北京から神戸に住まいを移し、日本語で日本人を描き続け、第一作『につぼん虫の眼紀行』（法蔵館・文春文庫）を出したのは一九九八年のこと。それから一五年も経つ。蘇静君は湖南生まれで北京に進学し、卒業後も北京に残って出版社に就職し、非凡な業績を残してきた。しかし彼の専攻は日本とは全く関係ないし、日本語も話せない。だから彼と私とで『知日』を創刊するときには、私のような日本で暮らしている人間と、日本の外で暮らしているが日本のことを知りたいと強く思っている彼という、中国の今の時代の縮図のような組合せになった。他人を知ることとは我々を豊かにする。つまり「知日者」は「智者」だ。『知日』第五巻から誌名のロゴを縦向きに変え、「知日」の文字を横に並べず積み重ねるデザインにしたのも、「智」に見えるようにという意図があった。私は「智者無敵」という言葉を信じているのだ。

『知日』は二〇一一年一月初めに創刊された。北京での出

版記念パーティーでは「尖閣諸島の中国漁船衝突事件があったばかりで、中国では反日運動が起きているときに日本の雑誌を出すのはどうですか？」と多くの人から聞かれた。私の答えは「一番相容れない相手から学ぶのが一番いいかもしれないですよ」というものだった。否定できない事実として、この数年、日本の内閣府の調査結果では、中国に好感を持たない日本人が八〇%いる（『読売新聞』二〇一二年一月二五日）。今の日中関係は、一九七二年の日中国交回復以降で最悪の段階ともいえる。

『知日』は一人の人ではなく一つのチームであるから、皆がそれぞれ自分なりの視野で日本を観察している。中国文化の背景を参照する者、中国と日本以外の国の文化と比較する者、記事の端々から各人の興味の在り方が読み取れる。何年も前の「視点論点」というNHKテレビ番組で「等身大」という言葉の意味は、「ありのまま」ということだ。誇張せず蔑視せず賛美せず、文化の記録と叙述として、今後の理解を深めるための道をつくる。後に『知日』創刊に参加したのもこのような理由からなのだ。

この二年、編集長の蘇静君とはこまめに連絡をとり続け、雑誌作りの構想の多くは国際テレビ電話から生まれたもの

だ。一緒に上海と北京の大学に行って開催した『知日』講演会、ブックフェアへの参加、テレビ番組への出演、日本各地への取材旅行……彼との付き合いのなから、私は二五年も前の、まだ日本に来る前の感覚を探り当てたようだ。

当時は単純な好奇心を持っていた。飛行機から降りると日本の空気が味噌のにおいがすると感じたように、見るものすべてが新鮮だった。幼稚園の子供が真冬でも半ズボンをはいているのを見ては、この子達は関節炎になったりしないのだろうか、もっと小さいときは尻割れズボンを穿くのだろうか、とかそんな疑問が山ほどあった。あるとき思い切って学者に質問したら、「日本のことは、頭で考えるのではなく、目で見るのが一番だ。日本料理みたいなもので、味わいと目で見る楽しみの価値が半々くらいだ」と言われた。

『知日』の編集者はみんな「八〇後」世代だ。私に比べると、家から世界を見ることが多い若者であり、目で観察することも多い若者だ。DVD、アニメにインターネット。私が彼らの年齢だった頃と比べて、あらゆるメディアが桁違いに増えた。日本の出版業界の友人からは『知日』は作りが綺麗だと褒められることが多いが、そんなときはこう答える。「中国の若者の眼は、相手の国の文化を細かく、深く見るから」と。

例えば、『知日』猫特集の表紙は、猫の鼻のアップだ。出

版前に若いスタッフから幾つかの案が出され、そのなかから私はこの表紙を強く推した。編集長とデザイナーには、日本の書店で見かける猫の本で鼻のアップはほとんど見かけない、多くが猫の眼だと主張した。他がしないようなことを敢えてしていこうというわけだ。

また『知日』鉄道特集の表紙はおもちゃの列車だ。このマニアックな一品は『知日』制作スタッフが私と一緒に神奈川県に取材した夏に購入したもので、蘇編集長がこれを気に入って激写しはじめ、後日表紙を飾ることになった。これらの表紙は本格的な編集会議で決まったわけではなく、たいていは各人の感性から生まれたものだ。

私は日常の観察、すなわち小さなことから大きなことが分かる主張してきたが、もう一つ、慌てず騒がず落ち着いた気持ちで相手の国の文化を見るべきだとも主張している。

今年の夏、『知日』取材チームと一緒に富士山に登ったが、やはり年のせいでは若い編集長にかなわず、途中であきらめた。編集長は登頂に成功し、ご来光も眺めた。『知日』第七巻に彼はこう書いている。「これから富士山に行かれるならば、下から見上げるだけでなく、是非登頂するようお勧めする」。

『知日』の雑誌作りの原則は、中国の読者のために日本の

生の体験、直の体験を提供することにある。日本の文化、芸術、クリエイティブや旅行などを表現し記録することに努め、ついに二〇一三年には月刊誌としてリニューアルした。

最後に、『知日』高野山取材の感想を紹介しておきたい。

私達は無量光院に宿泊した。土生川正賢住職は私の二五年來の友人である。日本に来たばかりの頃、彼はまだ京都外国語大学の学生だった。北京で彼と知り合った時、私は北京大学を卒業したばかりで、彼が北京に短期留学に来たときに一緒に万里の長城に登った。道々夢を語り合い、彼は僧侶になるつもりだと言い、私は教授になるつもりだと言った。その後、二人とも当時の夢を実現したわけだ。この話に、その場に行った『知日』取材チームは感慨を覚えた。時間とはすべてを豊かにすることができると感じたらしい。取材を終えて車に乗り込み、無量光院を後にする際、土生川住持は合掌しながら言った。「空海大師が今日我々を会わせてくれたことに感謝します」。

この話は『知日』にも書いたことがあるが、時間がすべてを豊かにしてくれること、『知日』は中国と日本が共有する時間の一つであり、長い歴史の大河の中の一滴の水であることを、今また改めて確信するのだった。

(もう・たんせい 作家 神戸国際大学教授)

【東方書店にて好評発売中】

知日(一〜二号) 苏静主编

中信出版社 各册税込二、五七二円



知日(最新号)  
特集：断舍離

三重大学人文学部30周年記念事業

三重大学伊賀連携フィールド開設1周年企画

「忍者」からみた日本と中国―交流の歴史と未来

▼日時…9月6日(金) 13時〜17時、7日(土) 10時〜15時  
▼会場…ハイトピア伊賀3階 上野商工会議所コミュニティ情報プラザホール▼入場無料▼プログラム…【6日】《セッション1 忍者の原像と変容―日本・中国との影響関係》ゲスト…崔世广(中国社会科学院日本研究所教授)「忍者」を通してみた日中文化交流 片倉望(三重大学人文学部教授)「孫子」と『万川集海』とを比較して 川上仁一(三重大学社会連携特任教授)中国の「間諜」と日本の「忍者」《セッション2 「忍者」像の形成と現代文化》ゲスト…関立丹(北京語言大学日本語学部長)忍者文学と中国 秦剛(北京日本学研究中心副教授)中国の娯楽・メディアの中の「忍者」 唐永亮(中国社会科学院日本研究所副教授)現代中国における「忍者」文化の伝播と受容【7日】《セッション3 「忍者」像の展開と交流の可能性―クロスカルチャラルの若者文化》ゲスト…上野高校生、三重大学留学生▼お問い合わせ…三重大学人文学部チーム 総務担当 森本 E-mail: numsonmu@ab.nie-u.ac.jp ☎ 059-231-9194